

双六（青樓春道中双六）

へ立つ春に 廓の遊びの双六も 賽先よしや吉原へ 抜ける恋目の三つの  
朝 五十路に余る宿々を 此処によそえて五十間 日本堤や日本橋  
へその振り出しの袖の梅 昨日の儘の二日酔 若湯の声に起こされて心  
浮き立つ弾き初めに へいろ品川の海ならで 二挺鼓の波の音 川崎かけ  
て門礼の 名札も洒落て神奈川に 台の扇の富士祝う 保土ヶ谷過ぎてほ  
のぼのと 窓の戸塚に朝日かけ 霞む筑波に藤沢は ゆかりの色の江戸町  
や へ青物売りも大磯に 魚市場の名を忍ぶ 小田原越えて仲の町 へ茶屋  
に芸者の箱根山 へ恋の関所の大門で ちらと三島のとりなりにはまる  
沼津の座敷から 初会ながらも惚れすぎて へつい蒲原の感づかれ遣り  
手に気をば興津川わごと鞠子のそらしても 岡目岡部の朋輩に 松にしが  
らむ藤枝の へ離れぬ仲と黝らるる 鬢のほつれの島田宿 へ大井川をも  
相乗りに 末は女夫と神々へ 心で願ひ掛川も 見つけられじと今切の人  
目を忍ぶ楽しみは 他に荒井じゃないかいなへまだそのわけも白須賀の  
二人禿の二川やへ仲も吉田に御油赤坂 とんで数ゆる賽の目も 一イニウ  
三ツつ四日市 いつか桑名へ舟漕いで やら／＼目出度の櫓拍子も 七里  
のわたし七福神つると亀山初夢に 鈴鹿を越える雲となり 又土山の雨と  
なり 約束堅き石部から 二つ余って草津まで きぬ／＼惜しむ朝帰り  
へ又も大津と京町へ 上る一座のうら馴染み むつまし月に双六の名札  
もまして清元の 流れの栄えぞ目出度けれ